

# 博士論文

近代以降の日本が追求した  
「書之美」に関する研究  
—「革新派」及び「伝統派」の分析を通じて

(要約)

令和4年9月  
広島大学大学院総合科学研究科  
総合科学専攻  
林 淳

# 近代以降の日本が追求した「書の美」に関する研究

## —「革新派」及び「伝統派」の分析を通じて

目次	…1
序論	
第一項 課題認識と本研究の展開	…3
第二項 本研究の目的	…4
第三項 「革新派」と「伝統派」	…5
第四項 本研究の構成と内容	…6
第一章 「革新派」による書の制作理念	
第一節 「革新派」登場に至るまで	
第一項 日本における「芸術」「美術」の用例	…9
第二項 「美術」の語の定着と書との関係	…10
第三項 展覧会と書	…12
第四項 西洋美学と書の接続可能性	…16
第二節 「革新派」の発言にみるそれぞれの制作思想	
第一項 「革新派」の源流	…21
第二項 「革新派」の書家の発言—比田井の直弟子たち	…22
第三項 「革新派」の書家の発言—その他の書家	…25
第四項 書家周辺の発言	…29
第三節 井島勉の書道観とその問題点	
第一項 「書の美」と美学者井島勉	…32
第二項 井島の芸術観	…33
第三項 井島と書家の接点・影響・態度	…34
第四項 井島の書道観	…35
第五項 井島の問題点—萱のり子の批判	…37
第六項 井島の問題点—現代偏重	…38
第四節 久松真一の禅芸術思想	
第一項 久松真一と森田子龍—本節の目的	…44
第二項 久松の禅理解	…44
第三項 久松の考える禅と芸術の関係	…46

第四項	久松の考える禅芸術の表現とその評価	…48
第五項	久松の問題点	…50
第一章	小結	…53
第二章	「伝統派」による書の制作理念	
第一節	「伝統派」の思想の整理	
第一項	「伝統派」とは何か	…56
第二項	戦前までの書に対するイメージ	…57
第三項	「伝統派」の書家の発言	…58
第四項	「伝統派」に近い書家や周囲の発言	…61
第五項	「伝統派」に含まれない「伝統」の考え方	…63
第六項	「革新派」との比較	…65
第二節	書道史上における「伝統派」の位置づけ	
第一項	中国の書論	…71
第二項	墨跡のあり方	…72
第三項	「伝統派」以前の書の制作思想	…73
第三節	「伝統派」の背景にある思想	
第一項	禅と芸術をつなぐ「幽玄」	…80
第二項	能楽の芸術性と「伝統派」の書	…81
第三項	「禅的なもの」と「諸芸のさとり」	…83
第四項	「伝統派」の書と「道」	…85
第四節	西脇呉石の芸術書観	
第一項	西脇呉石について	…91
第二項	「海石先生書簡集」にみえる明治期の西脇像	…92
第三項	西脇の書道観	…93
第四項	西脇の芸術書観を取り巻いた「現代」	…96
第五項	西脇の作品	…98
第二章	小結	…100
第三章	書の評価	
第一節	書の評価と分類	
第一項	書の評価の現状と分類の必要性	…104
第二項	書を評価するスタンス—解釈と鑑賞	…106

第三項 書の種類	…110
第四項 各分類の精査	…111
第二節 書を評価する語としての「韻」と「個性」	
第一項 書と「韻」	…120
第二項 「韻」の発現について	…121
第三項 書と「個性」	…123
第四項 「個性」とは何か—書家たちの理解	…124
第五項 「個性」は書にどう発現するか	…128
第三節 実際の作品評価	
第一項 古典の評価	…131
第二項 「革新派」作品の評価	…137
第三項 「伝統派」作品の評価	…141
第三章小結	…146
結論	…148
あとがき	
画像出典一覧	…151
文献一覧	…155

## 学位論文の要約

本研究は、一九一〇年頃から一九七〇年頃を中心とする、近代以降の日本が追求した「書の美」を言語化しようとするものである。ここで「書の美」という語を使用するのは、この時代の制作が目指した「書の芸術性」が美を志向していたとの判断による。「書の美」とは何かという問いに対しては、中国における無数の書論の展開を含めこれまで数多くの分析があった。しかし制作者や評価者によってその「美」を言語化されていない作品について、そこに見過ごされている「書の美」があるのではないかという観点で取り込まれる研究は少ない。より端的に言えば、現在も書の研究の多くは、書という芸術において現在評価がなされている種類に限られた範囲での研究となっている。本研究はこの点を大きな課題と認識し、現在見過がされている「書の美」について、芸術経験としての鑑賞も重視しながら再評価しようとするものである。その過程において特に、近世までの書が近代日本の芸術へと脱皮する中で成立した「伝統派」に着目する。「伝統派」は著者が初めて設定する集団の区分であり、当然先行研究もないため、幅広いテキストからその全体像を浮き彫りにする作業を通して該当する人物を絞り込んだ。なお、その結果本研究で「伝統派」として取り上げることになった4人の書家（豊道春海・西脇呉石・松本芳翠・沖六鵬）は、書の世界で無名の人物ではない。彼らはそれぞれ没してから半世紀ほどを経過しているが、今も各方面で名のある人々である。しかし、これまでその作品に対する評価基準はあいまいで、そのために支持者からも批判者からも客観性のある評価がなされてこなかったと言わなくてはならない。本研究は彼らの制作思想を分析し、実作品の評価も通じてその「書の美」を改めて考察することで、近代以降の日本における「書の美」に対する理解の基盤を広げようとするものである。

この「伝統派」の制作理念をより具体的に把握するための手法として、やや世代の下がる「革新派」との対比を行う。戦後、書が日展という大型美術展にようやくその居場所を獲得すると、各種の新機軸を打ち出した制作が展開されるようになった。この制作は、「伝統派」とは明らかに異なる制作理念によってなされ、当時の書道界に混乱をもたらした。この新しい制作を展開した書家たちについては、現在もその孫弟子やひ孫弟子が書壇で多く活躍していることも影響して、これまで各種の先行研究や一般書籍が比較的多く取り上げてきた。本研究ではこの「新機軸を打ち出した」書家たちを「革新派」と称し、「伝統派」と対比させることで両者の芸術性の違いをより鮮明に描き出していく。この「革新派」という名称も著者が独自に名付けたものである。なお、「革新派」は比田井天来の門流がほとんどを占めており、本研究では大澤雅休・上田桑鳩・手島右卿・金子歐亭・宇野雪村・千代倉桜舟・森田子龍・村上三島・井上一・青木香流をその枠の中で紹介する。

以下各章についてまとめる。第一章ではまず、「革新派」が登場する背景について、「美術」の概念の輸入やそれに続く展覧会という枠組みに書が居場所を得られなかった時代背景な

ど、近代初頭の書のあり方そのものを描き出す。その上で「革新派」個別の思想を挙げ、そのバックボーンとして京都大学の美学者である井島勉が果たした役割をまとめる。井島は、「革新派」が拡大していく過程でその思想の言語化が必要になり、森田子龍が外部から招へいすることに成功した人物である。なお井島の芸術観や書道観は、書の「革新的な」制作全てを包含するものではない点に注意が必要である。また、この井島の最大の問題点として、伝統的なあり方を丁寧に探ることなく一律に否定してしまった点を指摘する。第一章では特に、井島勉の芸術観のキーワードである「表象性」が重要となる。これは先行研究が既に言及しているが、これが書という芸術を観る上で必須になる場合と、これを適用すると全く見当違いな見方になる場合があるという点が、本研究の着眼点として特に重要である。本章ではさらに、森田が影響を受けた久松真一の禅思想をまとめ、「伝統派」の思想を探るための橋渡しとする。これらを総合し、「革新派」の制作理念は「主客を対象化した制作」であると結論付ける。

第二章では、「革新派」に批判されることの多い「伝統派」について、初めにその思想を整理し共通項を示す。そしてその思想が確かに「伝統」を引き継いだものである一方、引き継がなかった「伝統」があることにも言及する。これは書という芸術が、他の伝統的な芸術と同様に新時代に合った価値を自らの中に再定義しようとした結果、「伝統派」が選択した結果であった。さらにこのあり方が、実は第一章で取り上げた久松真一の思想体系をヒントに分析できることを示し、その方向性や理念をまとめる。特に久松の禅思想のキーワードである「無相の自己」の概念を書の制作理念の分析に導入する点が重要となる。これを理解することで生まれるのが、「諸芸のさとり」を「無相の自己」すなわち「宗教としての禅」と区別する視点であり、それによって初めて「伝統派」の制作理念も理解できる。その結果、より客観的にその作品を評価する道を拓くことができた。そしてこれらの分析を通じ、「伝統派」の制作理念が、老荘的な「道」・「宗教としての禅」・「諸芸のさとり」の重なる部分に成立し、「幽玄」・「芸道」・「自然」「主客未分」といったキーワードによって成り立つものであることを示す。また、この「伝統派」のあり方を検証する具体例として、西脇呉石の人物像と作例を紹介した。このように人物像を掘り下げる姿勢は、第三章にまとめる書の評価するスタンスの一端を示すものでもある。

第三章では、それまでの考察の上にまず書の分類を試みる。これによって、「伝統派」も含めたより広い範囲の書を一望する土台を整える。さらに、書の評価に関して漠然と用いられてきた「韻」や「個性」という語の用例を挙げ、評価に際して混乱を生む要因を事前に整理する。そして最後に、書論など外部情報を含めた「解釈」と、芸術経験としての「鑑賞」を組み合わせるスタンスによって、「革新派」「伝統派」双方の実際の作品評価を試みる。これによって、前章までにまとめた「革新派」「伝統派」双方を共通のスタンスによって評価し、今後書の分野においてとることのできる具体例として示した。本章で重要な点は、書の評価における「解釈」と「鑑賞」の提示である。「作品制作の背景を各種の資料からよく調べること」と

「作品をよく観ること」とを通じて、目の前の作品を評価しようとする姿勢は何も珍しいものではないが、これをあえて強調するのは、書においてはこれまで「伝統派」の作品評価にこの姿勢があまりにも欠けていたからである。しかし「解釈」と「鑑賞」という姿勢をもって作品に対峙することで、これまで評価の分かれていた作品にもより適切な基準を与えられることも、過去の実際の評価例を通じて示した。

本研究は以上全三章を通じ、これまで見過ごされてきた「伝統派」の「書の美」を見出すものであり、それは井島が「革新派」に対して行ったのと同様に、「書の美」の新しい地盤を開拓した研究として芸術史に位置づけられると考える。これは同時に、「近代以降の日本で判定されてきた「書の美」の偏り」を可視化することにもなり、近現代の日本書道史をより広い視野で説明できるようになったとも考えている。ただし著者は、現在の展覧会における書やその評価を否定する気は一切ない。展覧会もまた「書の近代化」の結晶であり、展覧会だからこそ発揮されやすい芸術性があることは疑いないからである。本研究はあくまで、書が持つ幅広い芸術性に対して再認識を促すものである。

#### ○主なテキスト

- 青木茂・酒井忠康校注『美術』日本近代思想体系十七、岩波書店、一九八九年  
天野一夫監修『書の美（復刻版）』全二巻、国書刊行会、二〇一三年  
安藤更生・堀江知彦編『今日の書道』二玄社、一九五四年  
井島勉『美術教育の理念』光生館、一九六九年  
井島勉『書の美学と書教育』墨美社、一九五六年  
井島勉『美学』創文社、一九五八年  
井原雲涯『鳴鶴先生叢話』興文社、一九三七年  
上田桑鳩『蟬の聲』教育図書研究会、一九六九年  
宇野雪村・比田井南谷編『現代書』全三巻、雄山閣出版、一九八三年  
王原祁纂輯・孫霞整理『佩文齋書畫譜』全五冊、文物出版社、二〇一三年  
岡麓校訂『入木道三部集 附本朝能書伝』岩波書店、一九三一年  
表章・加藤周一校注『世阿弥禅竹』日本思想大系二十四、岩波書店、一九七四年  
勝山城博物館『生誕140年記念 福井の偉人書家西脇吳石』勝山城博物館、二〇一九年  
金谷治訳注『莊子』全四冊、岩波文庫  
金子鷗亭・手島右卿・宇野雪村監修『現代書事典』講談社、一九七〇年  
鈴木大拙『鈴木大拙全集』第十一巻、岩波書店、一九七〇年  
高田真治・後藤基巳訳『易経』全二冊、岩波書店、一九六九年  
田中成軒『天来翁書話』復刻再販、飯島書店、一九七四年  
田宮文平『「現代の書」の検証2』芸術新聞社、二〇〇七年  
寺山且中『筆禅道』二版、柏樹社、一九八七年

道元『正法眼蔵』全四冊、水野弥穂子校注、岩波文庫  
栃木県立美術館編『豊道春海』栃木県立美術館、一九八二年  
中田勇次郎編『中國書論大系』全十八卷（既刊十五冊）、二玄社  
西川寧編『日本書論集成』全八卷、汲古書院  
西川寧編『書の変相』二玄社、一九七六年  
蜂谷邦夫訳注『老子』岩波書店、二〇〇八年  
服部北蓮『梧竹堂書話』日本習字普及協会、一九六七年  
早川純三郎編『日本書画苑』第一、国書刊行会、一九一四年  
久松真一『増補 久松真一著作集』第五卷、法蔵館、一九九五年  
兵庫県立近代美術館学芸課『森田子龍と『墨美』』兵庫県立近代美術館、一九九二年  
松本芳翠『臨池六十年』二玄社、一九六二年  
マルティン・ハイデッガー『芸術作品の根源』関口浩訳、平凡社、二〇〇八年  
森田子龍『書一生き方のかたち』日本放送出版協会、一九六八年  
山崎正和編『近代の藝術論』中央公論社、一九七九年  
『続群書類従』第三十一輯下、続群書類従完成会、一九三三年  
『書原』全五十七号、書原社  
『書勢』全六十八号、書学院  
『書勢』第十三卷第八号終刊、大同書会出版部  
『書道』全七六七号、五禾書房  
『書道』全一四七号、泰東書道院出版部（第二卷までは雄山閣発行）  
『書道芸術』第八卷第三号終刊、書道芸術社  
『書之研究』（発行巻数不明）、甲子書道会  
『筆之友』全一三六九号、書道奨励会  
『書之友』全四十三号、雄山閣  
『書品』全三〇〇号、東洋書道協会  
『美術之日本』第十五卷第八号終刊、審美書院  
『碑帖大観』全五十冊、書道研究会  
『文化書道』（発行巻数不明）、文化書道会  
『墨美』全三〇一号、墨美社  
『蛍の光』（発行巻数不明）、蛍の光出版部  
『龍門』全二十六号、墨美社

○主な参考文献

饗場一雄『書道の芸術学的究明 芸術の人間学的考察』平凡社、一九四九年  
岩城見一「井島勉『書の美学と書教育』—「表象性の美学」による〈書＝芸術〉論」『美術フォーラム21』三十九号、四十四～五十頁、醍醐書房、二〇一九年



王力軍「中国の伝統芸術思想における書の美学思想」『比較美学研究』Ⅲ、二十一～二十九頁、  
広島比較美学研究会、二〇一六年

大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』関西大学東西学術研究所、一九六七年

萱のり子『書芸術の地平 その歴史と解釈』大阪大学出版会、二〇〇〇年

熊倉功夫・井上治『日本の伝統文化シリーズ5 茶と花』山川出版社、二〇二〇年

栗本高行『墨痕—書芸術におけるモダニズムの胎動』森話社、二〇一六年

小松茂美『日本書流全史』(下)、講談社、一九七〇年

佐々木雄渾『純粹書道美学原論』全日本書道協会、一九五六年

杉村邦彦編『中国書法史を学ぶ人のために』世界思想社、二〇〇二年

杉村邦彦『書学論纂』知泉書館、二〇一八年

鈴木貞美・岩井茂樹編『わび・さび・幽玄—「日本的なるもの」への道程』水声社、二〇〇六  
年

中西慶爾「書壇百年史話〈戦前編〉」『近代日本の書』墨一九八一年十月臨時増刊号、一二〇～  
一二七頁、芸術新聞社、一九八一年

名兎耶明・高橋裕次『仮名文字と料紙の美 和様文化を味わうために』モリサワ、二〇一四年  
日展史編纂委員会編『日展史』全四十一巻、日展史編纂委員会

林淳『近世・近代の著名書家による石碑集成—日下部鳴鶴／巖谷一六／金井金洞ら28名全  
1700基—』第三版、勝山城博物館、二〇一八年

毎日書道事務局編『毎日書道展 毎日前衛書展作品集』毎日新聞社(正式な雑誌の名称は各回  
少しずつ異なり、編集者が別組織である回もある。)

前川知里「美術館運動史における書の位置付け—明治期を中心に—」『書学書道史研究』二十  
八号、五十七～七十頁、書学書道史学会、二〇一八年

宮澤昇編著『書道雑誌文献目録』木耳社、二〇一四年

柳田さやか「近代日本の「美術」受容における「書」の制度史的展開」筑波大学博士論文、二  
〇一八年

『中国法書選』全六十巻、二玄社

『日本名筆選』全四十七巻、二玄社

## 論文目録

### 学位論文

- 論文題目 (和文) 近代以降の日本が追求した「書之美」に関する研究―「革新派」及び「伝統派」の分析を通じて  
(英文) A Study on the "beauty of calligraphy" pursued by Japan since the modern era

- 第1章第3節 関係論文の4  
第2章第1節・第2節・第3節 関係論文の3  
第2章第4節 関係論文の1・関係論文の2

### 参考論文

#### I 関係論文

- 1 著者名：林淳  
論文題目：福井の偉人 書家西脇呉石～研ぎ澄まされた心と線～  
出版元：勝山城博物館  
頁，発行年：112頁，2019
- 2 著者名：林淳  
論文題目：西脇呉石の芸術書観 - 教科書揮毫者との二面性 -  
雑誌名：書論（査読制度あり）  
巻（号），頁，発行年：第45号，198頁-212頁，2019
- 3 著者名：林淳  
論文題目：近代日本における伝統派の書を形作る思想  
雑誌名：書論（査読制度あり）  
巻（号），頁，発行年：第46号，226頁-237頁，2020
- 4 著者名：林淳  
論文題目：井島勉の書道観とその問題点  
雑誌名：藝術研究（査読制度あり）  
巻（号），頁，発行年：第34号，17頁-31頁，2021

以上